

2025年度 2月泉の会 直子先生のお話

「こどもの権利」について考えよう

わたしたちには、一人ひとり大切にされる権利があります。命が守られること、差別されないこと、自分の思いを尊重されること、そして自分にとって最もよいことを考えてもらえること。わたしたち人間にはそのように、対等に尊重されるべき権利があります。けれども、こどもに対してはどうでしょうか。「大人の言うことを聞くのがよいこと」「大人の考えが正しい」「従うことが成長につながる」そんな前提で接してしまうことはないでしょうか。そして、そのようにできることで親としても評価されると考えてしまいます。

先日卒園生から、小学校の宿題で身近な人にインタビューをするという依頼を受けて、自分の幼稚園時代を振り返ったことがありました。わたしは5歳の頃、保育所で親友にけがをさせてしまったことがあります。遊んでいる最中の出来事でした。友だちの後頭部から流れ出た血で真っ赤に染まったわたしの手！必死で「ごめんね！ごめんね！」と叫んだにちがいません。しかしその次の記憶は、両親と一緒にその子の家へ謝りに行った場面でした。両親はきっと、わたしのためを思ってそうしてくれたのだと思います。謝ることの大切さを教えたかったのでしょうか。わたしも両親から「謝りにいこう」と言われて、きっと「うん」と応じたのだと思います。けれども、その後のわたしの心の中には、「失敗してしまった」「また失敗するかもしれない」という不安や、「恥ずかしい」という気持ちが残ってしまいました。そしてそれはわたしの人生の土台に大きな影響を与えたのです。若かった両親が、もっとわたしのこどもとしての心情を尊重してくれ、わたしの言葉にならない恐怖や不安を理解してくれていたらどうだっただろう、と思うところがあります。そして実は、この26年間、善隣幼稚園で、こどもに向き合っている理由はここにあるのです。「わたしたち大人は、もっとこどもを信じよう！こどもの心に寄り添おう！」そう伝えたいのです。

こどもにも、その子なりの感情や考えがあります。しかし、それをうまく言葉にすることは簡単ではありません。だからこそ、わたしたち大人は「どうあるべきか」だけでなく、「この子は今、どう感じているだろう」と想像することが大切なのではないのでしょうか。こどもも自分のいのちを守り、自分らしく生きるために、自分なりに考え選びながら生きています。その権利を実現するためには、周りの大人の協力が必要です。こどもの気持ちに耳を傾け、その権利を守ることは、わたしたち大人の義務です。でも、そう聞くと「そんな立派なこと、できるだろうか」と不安になりますよね。わたし自身も、我が子に十分にできていたとは言えません。そこで、ぜひ心に留めていただきたい文章があります。

『子どもの権利は、大人の協力なしには実現しません。でもそれは、その子どもにかかわる大人の環境が整ってこそ、実行できるものです。例えば、お金、時間、協力しあえる人間関係……子育てには、こうした自分の努力だけでは整えられない、具体的な要件が欠かせません。子育てにかかわるみなさんは、ときに子育てを苦しいと思うこともあると思います。「苦しいのは自分の努力不足が原因なんだ!」と考えてしまいがちですが、さまざまな助けが足りない状況から余裕がなくなり、つらい状況となっていることも多いのです。どうか「うまくできない」とご自身を責めないでください。そして大人も、こまったときには、ひとりでかかえこまず、社会に向けて「たすけて」と言ってよいのです。「子どもの権利条約」では、国や社会が、子どもの育ちにかかわる人を応援する必要があると定めています(第18条)。失敗や試行錯誤をしながら、子どもといっしょにゆっくり歩んでいけたらよいのではないかと私たちは考えています。』

引用：子どもにかかわるみなさんへ 長瀬正子(「子どもの権利・きもちプロジェクト」代表)

『ようこそ こどものけんりのほん』より

つまり、子育てをひとりで背負わなくてよいのです。「こどもの権利」を守ることは、「完璧な親になること」ではありません。失敗や試行錯誤を重ねながら、こどもと一緒に成長していくことなのだと思います。一生懸命になっていると忘れてしまいがちな「こどもの権利」をいろんな場面で思いお越しながらかみましましょう。

(『ようこそ こどものけんりのほん』を朗読)

(2026.2)